「辞書」をめぐって

長谷部：私はほんとうに辞書が大好きで、たいてい２つぐらいは引き比べするほどです。語釈の違いに関心をもつ前は、辞書には正しいことが書いてあるものだと思っていました。
金田一：わりと主観的というか…『新明解国語辞典』の第四版などはいちばん個性的かもしれません。辞書作りには２つ方法があって、１つは「規範を示す鑑（かがみ）論」で、人の鑑となるような、見本になるような鑑としての辞書なんだという考え方。もう１つは、世間で使われている言葉を、ただ「そのまま写す鏡」という考え方です。例えば『広辞苑』に「うざったい」という言葉が載ってしまった！とびっくりする人がいますが、辞書に載ったから正しい、ではないんですよ。「うざったい」を注釈しないと困る人もいる…だから載せるわけです。辞書に載ってるからよいとか、正しいとか、立派だとか、そういうことはまったくないのです。
長谷部：広辞苑に載ったから正しい日本語、ではないのですね。
金田一：「正しい言葉って何だ？」とは、とても難しい問題です。「昔から使われていれば正しいのか」、「方言は共通語と違うのだから間違っているのか」という話にもなってしまいます。正しい日本語というのは…その人の気持ちがちゃんと表せる言葉──その人の気持ちを表現できて、心にそぐう言葉と言いますか…そういうものが正しいのかなと私は思います。あんまり「正しさ」や「美しさ」について考えてもきりがなくて、とらえどころもないんですよね。

巻頭インタヴュー

心にそぐう言葉の大切さ

Kindaichi Hideho
杏林大学教授
金田一秀穂

聞き手
長谷部匡俊（作曲家）

言葉の「乱れ」とは？

長谷部：先生は日本語の言葉の「変化」と「乱れ」について、非常に注意深くみていらっしゃいますね。
金田一：「変化する」というのは「変わる」ことですが、「変化はよくないことだ」と考えると「乱れ」となるわけです。自分が若いときに身につけた言葉が、その人にとっての正しい言葉のようなんですね。亡くなられた丸谷才一さんたちの話を聞いていると、やっぱり若いときに自分たちが習った言葉が正しいと思いたくなってしまう。それもそうですが、そうじゃなくたっていいじゃないか、というのが言語学者の立場なのです。どちらかと言うと「正しい」「間違ってる」ではなく「変わった」んだよ、それっておもしろいじゃない？って言うのが、私の役目かなと思っています。ですから、あんまり「乱れ」とは言わないようにしています。
長谷部：ラーメン屋さんで隣の若者が「これマジやばくね?」って言うのを聞いて、びっくりして見ると喜色満面、美味しそうに頬張っているんですね。
金田一：「鳥肌もんだぜ」なんて言ったりもして。
長谷部：でも話し手にとっては、すごくリアリティーがある。
金田一：そうなんですよ。そういう言葉で友達と共感できる。お互いに楽しいのであればそれでいいじゃない！と思います。だって僕らも若いときに、そういう言葉を使って怒られていたんですよ、すっかり忘れてますけど。いつの時代も若者というのは、自分の中に新しいものをもっていると思います。子どもや若者はウズウズした気持ちをいっぱいもっているけれど、出来合いの言葉じゃ表現できない。それで、自分たちで何か新しい言葉をつくる。誰かが使っているその言葉に「あーそれだ！」と飛びつく。

○ きんだいち・ひでほ
1953年東京に生まれる。上智大学心理学科卒、東京外国語大学大学院博士課程修了。杏林大学外国語学部教授。中国大連外語学院、コロンビア大学などの講師、国際交流基金日本語国際センター客員講師、ハーバード大学客員研究員などを歴任。著書に『適当な日本語』（アスキー新書）、『「汚い」日本語講座』（新潮新書）、『人間には使えない蟹語辞典』（ポプラ社）、『15歳の寺子屋 15歳の日本語上達法』（講談社）など、編者として『学研現代新国語辞典　改訂第四版』など多数。テレビ出演では「国語の神様」というキャッチフレーズもついた。

「語釈」比較のおもしろさ

長谷部：映画『舟を編む』にも出ていましたが、辞書を作るときに、「右」という言葉を定義するのが大変なようですね。それ以来ちょっとはまりまして、「右」と「左」をいろいろな辞書で引きまくりました。
金田一：岩波書店が左右を「この辞書の偶数ページのほうが右、奇数ページのほうが左」という──あれは辞書を作る人間の間では評判になった語釈だったんです。偶数ページと奇数ページ…辞書を見ながら分かるすばらしい語釈ですね。うちの父親は「右左が分からない人間が、どうして偶数と奇数が分かるんだ！」と言っていましたが。
長谷部：フフフ（笑）。
金田一：ほんとうであれば、絵の矢印で「こっち」と示せばいいのでしょうが、そういうことをするのは、国語辞典の編集者のプライドが許さないようなんです。言葉でどうしても表わしたいと彼らは思うらしいんですよ。僕が父親に「どうして絵で描かないの？いちいち言葉で言う必要ないでしょ」と言ったら、「うーん…」と嫌がっていましたね。
長谷部：「右」「左」の他に難しい言葉はありますか？
金田一：「前」と「後ろ」、「上」と「下」、「向こう」と「こちら」も難しいですね。位置や方向を表わす言葉は難しいんです。それを言葉で説明するということを考えるわけですよ、一生懸命。
長谷部：誰にも分かる客観的な言葉で説明するのは大変ですね。
金田一：そうです。中でも一番難しいのは「間（あいだ）」だと言われてます。「あいだ」という言葉を「あいだ」という言葉を使わずに説明すると…２つのものがあって、その２つのものが作り出す空間の…「あいだ」とどうしても言いたくなる（笑）。辞書の先頭に載っているのは、「あい（愛）」や「あい（愛）する」ですが、プロは「あいだ」という言葉を引きます。ものすごくめんどうな言葉なんですよ。例えば「本と本のあいだ」という場合は「部分」ではない。それから「期間」のような時間的なあいだもありますでしょ。いろいろな「あいだ」があります。時間的なあいだも、空間的なあいだも、この挟まっているあいだ（手で示しながら）も、うまく表わす言葉がないんですよね。

なまりや方言を大切にしませんか

長谷部：今度は、「話す」…ということについてうかがいます。先生は以前テレビの深夜番組の「なまり亭」というコーナーで、次々となまりを指摘されていました。ちょっとしたアクセントの違いにすぐ反応なさっていて…アクセントについてはご家庭で何か特別な教育を受けられたのですか？
金田一：僕はたまたま東京で生まれて、東京で育っていますので、共通語…僕らは標準語ではなく共通語と言いますが、その共通語のアクセントが何となく分かりますので、それから外れてるものが分かるだけです。ただそれの外れている地域はどこなのかと言われたら、全然分からなくて、和歌山か三重かと言われても僕には分かりません。
長谷部：日本語のアクセントはほんとうに多様なんですね。
金田一：難しいですね。それに、ゆれてる部分もありますね。それこそ学生には「しがつ（４月）」「にがつ（２月）」という言い方が多いです。そうではなくて、「しがつ」「にがつ」だと言うと、「えー!?」とみんな騒ぎます。アクセントというのはあまり知らないものです。
長谷部：「どのように」か「どのように」か、なども。
金田一：そうなんですよ。「いちご」と言う人が多かったりするんですよ。
長谷部：本来は…？
金田一：「いちご」です。それからガ行の鼻濁音が消えていますね。ほんとうに消えています。「カギ」や「ハガキ」はその発音じゃないよって学生たちに言うと「ワカンナイ～」。10人ぐらいに言わせると「ハガキ」ときちんと言える人が１人くらいはいるのですが、みんな違いが分からないような顔つきです。
長谷部：環境なのでしょうか？
金田一：宮城など東北の人は、わりとこれがきれいに言えるんですね。きれいに鼻濁音が残るんですよ。でも、東京周辺だともうだめです。
長谷部：音楽の世界では鼻濁音は非常に重要で、教科書の教師用の指導書を開くと、鼻濁音で発音すべきところには赤丸がついていますよ。たまに、「うちの地方では鼻濁音はありません」と聞きますが、そういうこともあるのですか？
金田一：はい、あります。九州にはなかったと思います。
長谷部：もともと？
金田一：はい。そのかわり「ぐぁっこう」とか言います。特に九州の人たちは「僕はなまってないから大丈夫」と言いますが…なまっています。逆に東北の人たちは「私、なまってるから嫌です」と言いますね。でもやっぱり方言は大切です。とてもリアリティーがあるというか。方言でしゃべると、気持ちがノるんだと思う。共通語でも話せないわけではないでしょうけど、共通語はやはりこう…借り物の言葉的なところがあるような気がします。それこそ、いわゆる「正しい言葉」でしゃべらなくてはいけない。そうすると、言葉に自分の気持ちがちゃんとノせられない。
長谷部：方言のない東京生まれの私たちには寂しいことですね。
金田一：そうなんですよ。方言がないのは残念だなと思います。
長谷部：家内の母親は、みかんが水分を失ってしぼんできた状態のことを「すばる」と言うんです。それは、「しなびる」のことですね？と言うと、「しなびる」とは違うと言い張るんです。方言辞典を引くと「しなびる」のことだと書いてあるんですけど、ネイティブの人にとってはやっぱり違うらしいです。
金田一：なるほどね。
長谷部：菜っ葉は「しなびる」けれど、みかんは「すばる」んだそうです。
金田一：すいかや柚子は「すばる」のでしょうか？そのほかにも家庭語というものがあって、うちでは、りんごが「ふぬける」と言います。辞典にも載っていないのですが父親もこの言葉を使っていました。長野では「ぼける」と言うらしいのですけれど。
長谷部：「ぼける」は言わないですね。
金田一：布団が「たぐまる」は言いますか？
長谷部：初めて聞きました。
金田一：これもうちの言葉です。布団の綿が片方に寄ってし

○ はせべ・まさとし
1965年東京に生まれる。1990年東京藝術大学音楽学部作曲科卒業。現在、器楽・声楽・劇音楽等、多方面にわたる作曲活動を展開すると同時に、文部科学省検定教科書の執筆・編集にも携わっている。

まうと「布団がたぐまっちゃった」と言うんです。家の中だけで通じる言葉です。そういうものも楽しいですよね。ですから正しい、正しくないというよりも、やっぱり気持ちを言葉にのせられるかどうかではないでしょうか。言葉って入れ物ですから。

敬語なんてイラナイ？

長谷部：先生がテレビで、上司に「お疲れ様」と言うのは正しくないんだとおっしゃっていたのも印象に残っています。敬語や謙譲語など、学者としての先生の立場から御覧になっていかがでしょうか。
金田一：敬語って変に偉ぶってしまうところがないでしょうか。そこが僕は気になりますね。それから敬語が過剰ではないかと思うときもあります。例えば、「患者さま」「新明解さんは」「学研さんは」とか。そういう過剰な敬語をなんとかしてほしいなと思います。でも世の中「敬語は残すべきだ」っていう考えが圧倒的に多いらしいですね。「敬語なんてないほうが楽でよくない？“です”“ます”でよくない？」と僕は思ったりするんですけど…。
長谷部：そこには儒教的な背景があるのでしょうか？
金田一：人の気持ちを慮（おもんぱか）ることが好きなんでしょうね、きっと。それから、怒られることが嫌だと思っているんじゃないでしょうか。相手を敬おうと思っているわけではなくて、相手から怒られないようにしようと思って、敬語を使っているような気がします。敬語は、相手を敬うための言葉ではなくて、相手に対して失礼のないようにするための言葉です。マイナスを避ける言葉であって、プラスにする言葉ではないのです。英語だと、プラスにする言葉や相手を喜ばせるような言葉が大切にされていて、そちらのほうが気持ちがいいです。「お世辞」ではなく「褒める」言葉が発達している。日本は褒めるというより、避ける言葉…しょうがないんですかね、敬語が好きなのは。
長谷部：その結果が「よろしかったでしょうか？」であったり…。若い人たちでも手っ取り早く使えるのが「コンビニ敬語」なんでしょうね。
金田一：言っておけば間違いないと思っているんですよね。でも、敬語の間違いはあるけれど、気にしすぎだし、それから、「あまり怒るのはやめませんか」と思うんです。失礼じゃないんだから。「役不足ではございますが」とか間違って言うこともありますが、「言葉ではなくて、気持ちを受け取ろうよ」と思います。

日本語の特徴とは

長谷部：音楽教育の中では「我が国の伝統的なものを大事にしよう」ということが言われていますが、一言で日本語の特徴というとどういうものでしょうか？
金田一：特徴…あまりそういうことを気にしない人間なので…。教えていて言うのもなんなんですが、実は同じだと思っているんですよ、すべての言葉は。同じだと思っていなければ教えられない。学生が「中国語のこの言葉の意味は分からない」と言っていたとすると、「それは日本人がこういうときにこういうふうに言う言葉だよ」と言うと分かってくれます。
長谷部：はい。
金田一：僕らはやっぱり基本的には同じ人間として、多少の表れが違っていても、同じ気持ちをもっているのではないかと思うんですよね。ですからあまり特徴は気にしていません。もちろん、書き言葉が難しいとか、音の数が少ないとか…100何個かしか音がないので、同音異義語が多い。だからアクセントや高低アクセントで区別する…。そういうことを言い出せばきりがないですけれどね。

言葉・歌

長谷部：私事ですが、この１月に台湾で私が作曲した音楽劇を上演します。その出演者の半数が台湾人です。外国の方にとっての日本語はどんなものなのかな？と不安です。
金田一：そうですよね…でも音楽だったら通じるようにも思います。下手に翻訳しないほうがいいのかもしれない。
長谷部：20年以上前は日本語でのオペラの上演も行われていましたが、最近は字幕を出して上演するようになりましたね。
金田一：僕は文楽を観ることが多いのですけれども、文楽でも、義太夫だけを聞いて分かる人って多くはないと思います。字幕が出るから、あんなこと言っているんだと分かる。歌舞伎の言葉も、もうだんだん分からなくなってきている。でもあれを現代語で演じられるのも嫌なんですよね。そのあたりが難しいところですよね。
長谷部：歌の中での言葉の役割を考えてしまうことがあります。
金田一：最近の歌では、日本語がほとんど聞き取れないものもあります。学生に聞いても分からないらしく、歌詞カードを見るんだと言います。
長谷部：教科書では日本語を大切に扱うために、アクセントの高低を調べているほどなのですが…。
金田一：歌にはカラオケのように自分のために歌うもの、合唱のように私たちのために歌うもの、プロのように聴かせるために歌うもの、この３つがあると思います。言葉にもそういうところがあるような気がしています。自分のために考えるために使っている言葉。伝えるための言葉やみんなで仲よくするための挨拶の言葉。そうした、Iとweとyouーーそんなふうに考えています。
長谷部：おもしろいですね。

人の鳴き声

金田一：例えば僕がカラオケで『真夏の果実』を歌っても、誰もちっとも感動しない。でも桑田佳祐さんが「四六時中も好きと言って」と歌ってくれたら、感動して泣くわけです。同じ言葉なのに、なぜ桑田佳祐さんはみんなを動かして、私の言葉は力がないのか。それはいったい何なんでしょう？同じ記号で、同じ意味を伝えているはずなのに。ポール・マッカートニーが日本に来て「for Fukushima people」と言って歌った『Yesterday』を聴きました。もうボロボロ涙が流れる。英語が日本語のように分かっているわけじゃないのに心が動かされる。どうやらその言葉の意味を聞いているわけではない気がするのですね。桑田さんやポールの声で歌われると、感動してしまう。なぜなんでしょう？

長谷部：言葉のまわりにあるものなんですね。
金田一：そこで考えたのは、人間には「鳴き声」があるかなということです。人間も動物なので、犬や猿と同じように「鳴き声」があっていいはずです。ところが、人間で「鳴き声」とはあまり言わない。でも、僕らも言葉が生まれる前は鳴き声でコミュニケーションをとっていたに違いない。そうすると、その鳴き声の善し悪し…何というか…「力」みたいなものがあって、僕は好きなアーティストの歌声を「鳴き声」として聴いているのだろうか？と思うのです。
長谷部：日本語の話から声と歌に関する深い話につながりましたね。
金田一：声は一体どのような働きをするのか、ほんとうに不思議です。そして歌はなぜか、普遍的に響く。言葉はそういう意味では、言葉になったとたんに狭くなる──通じなくなってしまうような気がしているのです。

インタヴューを終えて　長谷部匡俊

著名な国語学者の金田一秀穂先生ですが、厳格な姿勢で正しい日本語を説くよりも、ありのままの日本語の姿をつぶさに観察していらっしゃるのが印象的でした。私にとっては、ご自身のカラオケ体験を交えて語ってくださった「歌はホモ・サピエンスの鳴き声ではないか」というお話が特に強く心に残りました。歌われている言葉の意味内容を超えて心に響いてくる歌唱表現の本質について、大きな示唆をいただきました。

授業者に訊く―1

今回の「授業者に訊く」では、小学校・中学校ともに「ICTの活用」が実践されている内容であることが共通しています。
大阪市立本田（ほんでん）小学校での、６年生がタブレットを用いて、つくったリズムに旋律をのせていく活動をご紹介します。子どもたちはペアになり、熱心に取り組んでいました。

授業者：今村友美（大阪市立本田小学校）

本時の授業の位置付け

本田小学校は、昨年度から大阪市ICT活用事業モデル校として研究を進めています。子ども達はさまざまな教科で、ICTを活用した学習をしています。

本時は、タブレットを使って「喜怒哀楽の『喜』の音楽をつくる」活動を行います。これまでに学習してきた、音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組みを総合的に生かして、16小節の音楽をつくります。６年間の音楽活動の集大成となる学習にしたいと考えています。

本時は２時間目です。前時にペアで16小節のリズムをつくりました。また、『喜』のイメージに合わせ、タブレットで自分たちの声を加工しています。今日はその音源を使って、つくったリズムに旋律をつけて演奏していきます。８小節の音楽を演奏することを目指します。

銭本三千宏 先生
大阪市立本田小学校校長

授業の流れ

	○学習の内容　・学習活動	●指導上の留意点 ☆評価
導入	○『思い出のメロディー』を合唱する。 ・楽譜を見て、曲の特徴をとらえる。 ・曲の形式を確認する。 ・８分休符を生かした歌い方を工夫する。	●前時の学習を思い出しながら合唱する。 ●電子黒板に楽譜を提示する。
展開	○『喜』の音楽をつくる。 ・前時につくったリズムに旋律をつけていく。 ・ペアで交互に演奏し、問いと答えを意識した音楽をつくる。 ・Ａ－Ａ′の形式を意識して旋律をつくる。 ・つくった旋律を演奏する。	●リズム譜に階名を書き込んでいくよう助言する。 ●リズムが反復している部分は、旋律も反復させ、Ａ－Ａ′の形式を意識してつくるように、個別の支援を行う。 ☆「問いと答え」「Ａ－Ａ′の形式」を生かし、見通しをもって音を音楽に構成している。 （楽譜、演奏、発言内容）
まとめ	○つくった音楽を発表する。	●タブレットを電子オルガンに接続し、教室全体に音が聞こえるようにする。

タブレットを活用しての音楽づくり

聞き手：齊藤忠彦（信州大学教育学部教授）

タブレット使用のきっかけ

齊藤：学級担任をされていらっしゃるんですね。伴奏の演奏がお見事でした。ICTは以前から特別に取り組まれていたのでしょうか？

○いまむら・ゆみ
大阪市立本田小学校

今村：本校に来てから勉強しました。ちょうど大阪市ICT活用事業モデル校に指定されたのと同時に赴任して、現在２年目です。
齊藤：タイミングがよかったのですね。
今村：はい。他の学校であればここまで積極的に使う機会もなかったと思います（笑）。校長先生から、新しいことにどんどんチャレンジしてみることが大切だと言われています。今回は、「GarageBand（ガレージバンド）」*を使うことがチャレンジでした。先行の授業事例がなかったので、不安や悩みもたくさんありました。
齊藤：きっかけは、校長先生だったのですね。
今村：タブレットに入っているアプリを活用しようということで、授業で使うようになりました。「GarageBand」で即興的な音楽づくりをしたこともあります。子どもたちはとても楽しんでいたし、即興的に表現する力はついたと思いますが、何度も使う必要はないと感じました。それより、今まで学習してきた「音楽を特徴付けている要素」や「音楽の仕組み」を総合的に使って音楽づくりができないかと考えました。ICT機器を活用するには、それ相応の基礎的な力をつけておくことが大切だと痛感します。デジタルに頼るのではなく、どのように使っていくのかということです。

＊音楽制作ソフトウェア。画面上で楽器を演奏することもできる。

デジタルを目的としない

齊藤：今日の授業ではICTのみを扱うのではなく、前半は歌をきちんと指導なさっていてバランスがいいなと思いました。歌には15分ほど時間を取っていらっしゃいましたね。１時間の音楽の授業って複数の要素が入り込んでよいのではないかと考えています。最初に歌があり、楽曲の形式を学び、そして、音楽づくりにつなげていく展開がよかったと思います。
今村：今日はそこがねらいでした。『思い出のメロディー』は、A-A′-B-B′-A″の形式です。これまでに学習してきた『つばさをください』や『星の世界』などは、A″の部分がない曲だったので子どもたちは未体験の世界に戸惑うはずです。授業の中には、子どもたちの心を揺さぶる場面を作りたい。今日は、A″をCととらえる子もいるなど、まさにこちらの指導計画に入ってきてくれましたね。
齊藤：音楽づくりではリズム打ちをしたり、プリントに楽譜を書いたりしていました。ICTの活用の授業で、アナログとデジタルをミックスなさっていてすばらしいと思いました。タブレットを使えば、繰り返し音を聴いて、試行錯誤しながらつくることに集中できますよね。反面、例えば、DTM（Desk Top Music）ソフトを用いて楽譜を作成すると、１小節に音符がいくつ入るか自動的に計算してくれます。それだけですと、考えさせるという場面を子どもたちから奪ってしまいます。
今村：その点にはこだわりました。ICT機器を使うだけにはしたくないと思っています。私の思うICTのよさは、今回であれば「自分が出せない音域の声が出せる」という、不可能を可能にしてくれる部分と、今まで子どもたちは音楽をつくっても技術が伴わず演奏できないことが多かった、そこを「カバーできる」ところです。

アイディアのよさ！

齊藤：実際に今日はサンプリングした子どもの声を使っていました。サンプリングの声はある意味楽しくてたまらない反面、遊び的な要素も強くなるので、そこに抵抗感をもたれる先生方も多いと思います。

○さいとう・ただひこ
信州大学教育学部教授

今村：私自身が「GarageBand」に触れることで、「こんなことができるんだ。自分の声がこんなに変わるんだ」ということが分かりました。イメージに合った音を入力できる、これはおもしろいと思って使っています。
齊藤：先生がまず楽しかったんですね（笑）。
今村：そうですね。
齊藤：見事なアイディアです。「喜怒哀楽」というテーマもおもしろいですね。
今村：テーマについては、「色」にしようかとも考えましたが、色は抽象的すぎてイメージがもてないかと思いやめました。誰もが想像を膨らませることができ、自由な発想も生かせるものをと考え今日のテーマにしました。
齊藤：今日は「喜」の楽しそうな部分がよく見えました。「テストで100点とったとき」「プレゼントをもらったとき」など、子どもたちの意欲をうまく引き出しておられました。ところで、タブレットを導入していく上で気をつけなければならないことはありますか？
今村：タブレットは、魅力的なものです。子どもはずっと触っていたいと思います。だからこそ、ふだんからの学習規律はものすごく大事ですね。

ペア学習のよい点とは？

齊藤：本時では「リズムの反復」「問いと答え」をキーワードになさっていましたが、この活動をするにあたってペア活動になさった意図はどのあたりにあるのでしょうか？１人１台の活動も可能かと思ったのですが。
今村：協働的な学習ということを考え、２人で１台にしました。また、「問いと答え」を理解するにも、ペアでの学習が有効だと思いました。
齊藤：ああ、なるほど。
今村：アイディアも２人のほうがよく出ます。
齊藤：男女のペアでの活動もいいですね。ふだんから教室ではあの席（男女ペア）ですか？
今村：はい。作業を考えて本時はあえて普通教室で授業をしました。音楽室は机ではないため、２人での作業がしづらく、黒板も見にくいのです。最後に演奏した２人は、３連符を使いました。それを見た他の子たちが「それ何？」と言いだしたので、前時に「３連符はね…」と教え、他の子も使いだしました。
齊藤：子どもたちがお互いに学び合う場があるのですね。リズムも付点音符などを含めて、難しいところもよく理解していましたね。
今村：今日の子どもたちは５年生から指導しているのですが、５年生の最初に教科書の「リズムアンサンブル」に取り組みました。そのときに、教室にリズム譜をたくさん貼っておき、毎日連絡帳を見るときに、「〇番！」と言って挑戦するという常時活動をしていました。それから１小節の中にどれだけ音符が入るのかが分からない子のために、常に小さいリズムカードを束で教室に置いておきました。カードを組み合わせれば、１小節分が分かるものです。
齊藤：なるほど。
今村：５年生の後半ではヴォイスアンサンブルをして…６年生に入ってから、リズムに旋律をつけていき、それを変化させるという活動を行いました。そうやって積み重ねてきたものを、今回総合的に扱いました。
齊藤：基礎的な力が非常に高いと感じました。最初に歌った『思い出のメロディー』でも子どもたちの声が安定していましたね。まだ２回目とおっしゃっていましたけれど？
今村：ここから美しい二部合唱に仕上げていくことが課題です。

楽譜を読む大切さ

齊藤：これまでの授業で基礎的な力については、どのようにご指導なさっていますか？
今村：基礎的な力は意識しています。初任の頃は、元気よく楽しそうに歌えていたらいいと思っていましたが、大阪市の他の先生の実践を見て、子どもでもこんなにすてきな歌声で歌えるんだということを感じて、これではいけないと思いました。──それが先生になって２年目くらいの頃です。それから、どうしたらいいかなと考えるようになりました。目指す歌声も変化してきて、最近はやわらかいハーモニーがつくれるように指導しています。
齊藤：合唱部に近いきれいな声でした。
今村：ありがとうございます。あとは、とにかく卒業までに楽譜を読めるようにしたいということです。
齊藤：大事ですね。
今村：今までは合奏するときも、時間もないし、こちらで音名をふった楽譜を渡していましたが、それでは力がつかないので…。「楽譜を読めずに卒業するのは九九を知らずに卒業するのと同じだから、楽譜だけは読めるようになって卒業してね」と言っています。最初は「階名が分かる」ところから入り、リズムを学ぶことによって音の長さが分かるようになります。音の高さの感覚は、常時活動で身につけることができます。それが、譜面と合致すれば、かなり楽譜を理解できます。
齊藤：楽譜が読めないまま卒業してしまうという実態も見られる中で、とてもよい取り組みだと思います。
今村：読めたら広がる世界があるのに、中学生になってもそれが感じられないのは寂しいことです。
齊藤：小学校のうちから、楽譜の読める子と読めない子では、差がだいぶ開いてしまいますね。

今村：算数が好きな子は「１つの□の中にいくつ音符が入るか」というところが楽しいようですね。
齊藤：なるほど！
今村：先ほどの３連符も、そうやって説明したんですよ！
齊藤：具体的に教えてください。
今村：子どもが「先生、４連符はあるんですか？」って聞いてきたんです。「４連符というのは16分音符が４つ並んだもののことです」と答えたら「４連符のほうが格好いいやん。たくさん音もあるし」と言い出したんです。「それは違うよ。４連符は１を４で割るから0.25にきっちり割り切れるでしょ。でも３連符は１を３で割るから、0.3333…で割り切れないよね。その割り切れないタタタの微妙なニュアンスを自分の感覚で演奏して、またそれを人と合わせる魅力があるんだよ。３連符は算数で言ったら1/3で、小数では表せない分数なんだよ」と言うと、「そうなんだ！」と、算数は得意でも音楽には関心が薄かった子が目を輝かせていて。
齊藤：音楽にはそういう魅力もあるんだ、割り切れない魅力があるんだと。
今村：それから、３連符を使うのがちょっとしたブームになっています（笑）。

「指導する」ことの意義

齊藤：子どもたちとの関わり方で気をつけていらっしゃることはありますか？
今村：担任をしていることは大きいと思います。四六時中いっしょにいるので、この子はどんな子か…最初からいろいろ言われるより自分で考えてやりたい子なのか、最初からずっと付いて

いてほしい子なのか、といった距離感も分かります。もちろん音楽的な能力についても把握できます。そういうことをふまえて、音楽の指導にあたります。
齊藤：私が今の音楽教育全体の課題のように感じていることですが、先生が技術的な指導をためらう傾向にあるように思います。技術的なことを教えていないにもかかわらず子どもたちに「ここはどういうふうに表現したい？」と考えさせてしまう…。
今村：何も教えていないのに「どうしたい？」と言っても、たぶん子どもは分からないと思います。今日も歌唱のところで、８分休符を意識したために音が消えてしまって間延びした状態になった場面がありました。「そうじゃない」ことが分かるために、例えば「ブレスを意識すること」など、きちんと教えていかなければいけないことがあると思っています。
齊藤：そうですね。
今村：そういうことを何度か繰り返す中で、「あのときこうしたね」という言葉が子どもたちから出てきたらいいなと思います。授業のたびに「今日はここに到達する」ということがはっきり分かるようにして、そこに到達したら思いっきりほめるようにしています。そうすると８分休符や形式など、子どもたちは次の授業で使えるようになりました。

〔共通事項〕を手がかりにする

今村：私から齊藤先生に質問です。「問いと答え」って、簡単そうに見えて難しくないでしょうか？『かくれんぼ』の「もういいかい」「まあだだよ」のように、歌詞があれば分かりやすいですが、曲を聴いて「問いと答え」が明確に分かるかとなると、ものすごく難しいなと思います。それをどう子どもに伝えるのかと考えて、今回交互に演奏したり、音の高低を使ったりして理解できるようにしました。
齊藤：そうですね、ペアでつくるということが、すでに問いと答えになっていますね。〔共通事項〕についてはいかがですか？意識されていますか？
今村：〔共通事項〕として授業を展開してしまうと、おもしろくない気がしています。しかし音楽の仕組みを無視して音楽はつくれないので、いろんな方法があることは教えなければいけないし…。そこをどれぐらいもってきて、どれぐらい引いておくのか、そこが課題です。例えば、今日最後に演奏したペアの曲は、わりと複雑な音楽になっていましたが、形式にあてはめているので聴けたのだと思います。「形式って便利だ」ということを、子どもたちは感覚的に感じ取ったのではないでしょうか。
齊藤：そうですね。
今村：ですから「*f*」「*p*」などの強弱記号についても、あまり「強く」「弱く」とは言わないようにしています。「*p*」もその曲によっては「優しく」「愛らしく」「悲しげに」という表現になると思いますし。「*f*」だったら「豊かに」とか「感情的に」とも言えると思います。〔共通事項〕！これを教えなあかん！ではなく、音楽に合った表現ができる子どもを育てたいです。
齊藤：「問いと答え」を最終ゴールとせずに、それを手がかりとして音楽活動をしていましたし、「リズム」という要素も入れていらっしゃいました。タブレットの音は楽器の音ではありませんが、加工しているというところでは、「音色」の変化とも言えます。それをあえて「ここは音色だ！」「リズムだ！」と言うのではなく、自然な形で授業なさっていた点がすばらしかったと思います。

授業者に訊く―2

中学校は埼玉県戸田市を訪れました。戸田市立笹目中学校では校内合唱祭を目前に控え、３年生の思いが詰まった豊かな歌声が音楽室に響いていました。また、学校全体で取り組んでいる協調学習やICT活用を取り入れた授業が、音楽でも展開されていました。

授業者：山田宜広（戸田市立笹目中学校）

本時の授業の位置付け

本時は合唱祭に向けた活動の８時間扱いのうちの第２時です。本校の研究の柱である「知識構成型ジグソー法を用いた協調学習」を取り入れ、自己の考えを明らかにしたり、友達と意見交換をしたりしながら、表現の工夫について考えさせました。さまざまな意見を取り入れながら繰り返し歌うことで、自分たちのクラス合唱を完成させ、みんなで合唱を成功させようという意欲を高めていきたいと思います。

合唱祭は体育祭と並んで生徒の意識が高まる行事の一つです。特に３年生にとっては最後の合唱祭であるため強い意気込みが感じられます。今回の学習を通して、混声合唱にふさわしい歌声を意識しながら表現を工夫したり、ハーモニーを感じることによって合唱のすばらしさを体験させたりしたいと思います。

戸ヶ崎 勤 先生
戸田市立笹目中学校校長

授業の流れ

	○ 学習の内容　・学習活動	●指導上の留意点　☆評価
導入	・発声を兼ねて『信じる』を歌う。	●前時までの学習を振り返るとともに、落ち着いた学習の雰囲気をつくらせる。
展開	○ 課題の確認 クラスで話し合った内容をもとに、後半の部分を中心に表現を工夫しよう。	
	○表現を工夫する。 ・クラスで話し合った表現の工夫を電子黒板に表示する。（具体的なポイント） ・必要に応じて、改善点を確認し部分練習をする。 ・全体を通して歌う。	●「歌う→考える→歌う」の学習形態により、試行錯誤しながら表現を工夫させる。 ●課題を意識し改善させる。 1．発音（子音、口の開け方、顔の表情、ノドの奥の開け方）の具体的な例を挙げ、模唱をして改善させる。 2．旋律や音色、声量のバランスなどについて改善させる。 3．歌詞の内容を味わいながら、歌わせる。 ☆歌詞の内容や曲想を味わったり、声部の役割と全体の響きとの関わりを理解したりして音楽表現を工夫し、どのように合わせて歌うかについて思いや意図をもっている。
まとめ	○ 教師から本時の学習の評価を伝え、合唱祭への意欲につなげる。	

音楽科教師だからこそ伝えられること

聞き手：橋本裕子（足立区立第四中学校）

生徒との信頼関係

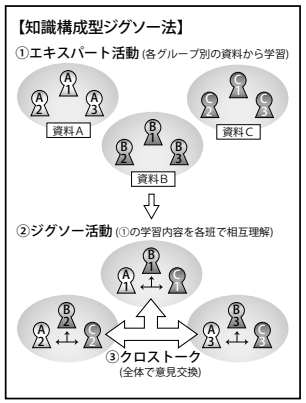
山田：先生に授業をご覧いただくということで、私も生徒たちもお互いによそ行きだったと思います。
橋本：ちょっとですよね？それともかなりですか？（笑）

○やまだ・よしひろ
戸田市立笹目中学校

山田：生徒たちはふだんもっとにぎやかですね。ただ、にぎやかで話を聞いていないのかなと思っていても、「はい、歌おう」と言えば歌うんです。
橋本：にぎやかなクラスのほうが緊張していなくて、歌いやすいのではないですか？
山田：いろいろと反応してくれるので授業はやりやすいです。コミュニケーションをとるうえでは、「とりあえず何でもいいから話してみなさい」と言っています。打てば返ってきますし、言いたいことは言ってくれるので、楽しいクラスです。間違ったことを言ってもいいわけですし。
橋本：そういう場面が何度かあり、緊張してしまうよりもよかったです。おそらく、ふだんからの信頼関係があるからこそ、「ここは先生のためにがんばろう」という雰囲気になっていたのではないですか？「この子たちは先生のことが好きなんだな」と感じました。
山田：ありがとうございます。

協調学習の活用

橋本：協調学習の資料を先にいただいていたのですが、「これを音楽にどう活用するんだろう？」とやや疑いのまなざしでした。しかし、今日の授業を見て「なるほど、このように活用するんだ」と納得しました。
山田：音楽はイメージが大事ですし、歌詞や旋律がそれぞれどのように考えてつくられているのかの理解が深ければ深いほど、思いが強くなっていくと思います。なので、このように表現の工夫について話し合いをして積み重ねることで、合唱をよりよくしていきたいと考えました。
橋本：生徒たちの話し合いは、ある程度、先生が誘導されたのですか？
山田：はい。歌詞に関しては、生徒からすごくおもしろい発想が出てくるのですが、アナリーゼのような音楽的な部分に関しては、なかなか意見が出てきません。実際のところ、楽譜にあまり慣れていないんですよね。まず、生徒たちはほとんど楽譜を見ないんです。楽譜を見ずに、私の範唱を聴いて覚えて歌う生徒もいますので、「ここはどうなってる？」「ここは追いかけっこになっているでしょ」と楽譜を示して気付かせたり、難しい表現記号に関して全部説明したりしました。そして、「他には何かないかな？」と聞くと、やっと自発的に考え始めるのです。
橋本：それに気付くと、生徒がそれぞれ受け止め、その後の歌の雰囲気が変わりますよね。
山田：そうですね。それから、生徒たちはト音記号とヘ音記号を同時に見るのが難しいようで、女声と男声がユニゾンなのか、ハーモニーなのかということに気がつきません。そういうときはピアノで弾いて、「どう？同じ音だよね？」などと確認させます。
橋本：『信じる』には、「♪黙って黙って黙って」と同じような音形がパートごとに少しずつ違う音で出てくる部分がありますが、先生はどのように注意を伝えられているのですか？無造作に歌ってしまうことが多いと思うので…。
山田：掛け合いになっている多声的なところと和声的なところがある、というヒントが書かれたプリントを作りました。もちろん、これを見たからといって生徒が「ここは多声的です」「和声的です」とすぐに見分けるのは難しいのですが、こちらから「ここはやりとりになってるでしょ」と伝えて気付かせました。
橋本：なるほど。



山田：「多声的」な重なりのときはどのパートも役割が同じなので、「サポートではなく同じ立場で歌うんだよ」と話しました。例えば「♪自分にうそがつけない私」の部分は、「多声的」になっています。そのやりとりがあった後、次の「♪信じることに」の部分では「和声的」になります。この部分は三声のハーモニーになりますので、「ソプラノを生かすようにしたほうがいい」「ここのソプラノは思い切って強調して」という言い方をしました。

歌詞と曲にこめられた思い

橋本：歌詞をとても大切に考えていらっしゃるという印象を受けたのですが、そのほうが生徒にとって分かりやすいと思われたからですか？
山田：そうですね。合唱曲はある歌詞にメロディー、ハーモニーをつけていくという手順を踏んでつくられます。作曲家は一生懸命歌詞を読み、自分で思い浮かべたイメージを音にしているわけです。もちろん歌詞は大事なのですが、なぜこの歌詞にこのようにメロディーがつけられて、このテンポにしたのかということに関しては、作曲家の意図があるはずなので、その意図をくみ取って伝えるということが、演奏するうえでは大事だと思っています。それが音楽の原点というか、音楽活動そのものですから。
橋本：生徒たちにもそのように言えば伝わりますね。

○はしもと・ゆうこ
足立区立第四中学校
※橋本先生は、足立区立第四中学校を副校長として退職後、現在は同校で音楽の指導をなさっています。

山田：加えて、前奏についても、この歌詞があってあのような温かい雰囲気の前奏がつくられており、その部分の作曲家の意図を生徒たちにも感じて歌ってほしいという思いがありました。な

ので、授業では、私が前奏をピアノで弾いて「どう思う？」という問いかけをしました。
橋本：そうすると、前奏から気持ちが入っていくんですね、きっと。
山田：そうなってくれたらうれしいなと思います。私自身がピアノで弾くほうが言葉で伝えるよりも得意なので…。

合唱祭へ向けて

橋本：先生のピアノによって１時間で『信じる』の合唱があれほど変わるとは思いませんでした。
山田：合唱祭へ向けた練習なので、ほんとうは授業でも生徒に伴奏を任せたかったのですが、練習が間に合いませんでした。指揮者も、クラスの中で立候補者がいなかったのですが、彼が一大決心をして手を挙げてくれました。正直、音楽が得意な生徒というわけではないのです。
橋本：でもクラスみんなのために、それから先生のためにという思いで指揮者に立候補してくれたんですよね。
山田：そうかもしれません。よく決断してくれたなと思います。
橋本：きっと彼にとってもいい経験になっていることでしょう。
山田：彼は本番までにもっとうまくなると思いますし、伴奏の生徒も本番に向けて練習を重ねています。
橋本：合唱祭は、上手な演奏はもちろんすばらしいけれど、みんながすごく「がんばる」というのが大事ですよね。
山田：生徒たちがお互いをサポートしていきます。途中で止まったり間違ったりしても、それに対して嫌な雰囲気にはならないので、えらいな、というか大人だなと思います。
橋本：でもそれは、先生が日頃から「合唱は指揮や伴奏がみんなバラバラなのではなく、お互いに支え合っているんだよ」と教えていらっしゃるからだと思いました。

電子黒板の活用

橋本：ところで、電子黒板は、ふだんどのように活用されていますか？
山田：パソコンにつなげているので、映像を見せるときに使っています。例えば、全国コンクールの映像などを見せるとたいへん効果的ですね。発声や顔の表情などの手本になります。
橋本：今回は協調学習の中で生徒から挙がった曲のポイントを表示されていましたが、あの手法は効果があったと思われましたか？
山田：板書をするよりも分かりやすいと思います。板書では何かを貼りつけたり書いたりする作業が必要ですが、ボタン１つで次へ進めることができるので、そういう意味では授業がスムーズに進行できます。
橋本：授業準備は、いかがでしたか？
山田：準備は大変でした。最初に作ったスライドは少し字が小さく、３項目ぐらいを１つの画面に提示していましたが、ちょっと見づらかったので、作り替えて文字を大きくしました。そのほうが生徒も見やすかったようです。また、教室の端にいる生徒にも見やすくなるよう、教室内の配置も考慮しました。

合唱祭への思い

橋本：『信じる』の合唱指導をすると、テノールが目立ってしまいどうにもならない状態になることがあるので、これだけきれいに歌えていて驚きました。とてもいい声で歌っている男子生徒がいましたね。
山田：彼は中心的な存在で、一生懸命歌っています。後ろの列にいるので彼の声が聞こえて全員が歌いやすいのです。それで、バランスがよくなったのだろうと思います。また、私自身が男性なので男子のほうが教えやすいですし、音取りもさせやすい。違っていたら自分が後ろで歌うことで音も合ってきますし、発声や表情のつけ方なども同じ声で歌うほうが伝えやすいです。
橋本：音楽の教員は、自分のもっているものが直接伝わってしまうので、しっかりがんばらないといけないですよね。何かご苦労されていることはありますか？
山田：クラスによっては、なかなか声を出してくれないこともあります。
橋本：そんなときはどうされるのですか？
山田：「出せ」と言います（笑）。
橋本：できるはずなのに、もったいないですよね…。
山田：そこで合唱祭を利用します。特に３年生には「合唱祭だぞ！」「今歌わなくてどうする！」と言うと、テンションが自然と高まってきます。
橋本：どのクラスも優勝したいですからね。ところで、合唱祭の後はどんな様子になりますか？
山田：合唱祭で歌ったらもう終わり！となってしまうこともありますが、合唱祭の後に「この歌を音楽室で歌うのは最後だから、締めとしていい歌を先生に聴かせてほしい」と言って、もう一度歌わせたことがありました。すると、どのクラスも合唱祭と変わらないどころか、本番以上にいい歌を聴かせてくれました。全員の顔を見ていたのですが、それぞれが一生懸命歌ってくれていたことがいちばんうれしかったですね。ほんとうに感動しました。
橋本：それですよ、先生！「最後に僕に聴かせてほしい」その一言じゃないですか？それを口先だけで言ったら絶対に伝わらない。本心から言ったからこそ伝わったんです！「最後だから聴かせてほしい」「よし、がんばるぞ」というように思いがつながっていくと、上手下手は別にしても、よい音楽の授業ができますよね。どこの学校の音楽室も、そうなったらいいと思います。
山田：合唱祭は、結果によってその瞬間ものすごく悔しい思いをすることもあるかもしれませんが、数日たてばどのクラスも出し切った満足感や充実感を感じているように思います。
橋本：それはうれしいことですね。
山田：緊張していると思うのですが、特に本番ではテンションの高まりがすごいです。
橋本：あの一生懸命な姿には、私たちも心を打たれます。以前、合唱祭の本番で指揮者の生徒が指揮をしながら曲の後半に泣き出してしまいました。すると、歌い終わったとたん、歌っていた生徒たちもわーっと泣き出してしまったことがあります。大人の私たちも心が洗われる瞬間でした。
山田：ほんとうに合唱祭はいいですよね。こういう経験ができるのは音楽教員冥利に尽きることであり、そのような指導の中心にいられるというのはうれしい限りです。
橋本：私もそう思います。大きな行事に関われるのはうれしいことなので、これからもしっかり関われるようにがんばっていかないといけませんね。

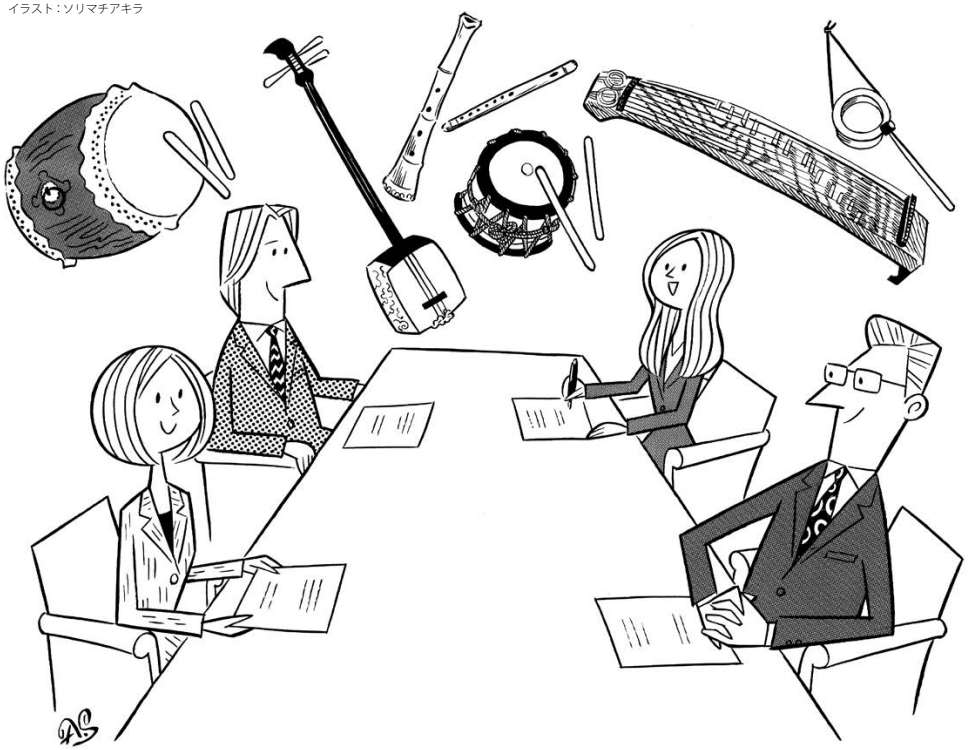
特集

和楽器の導入で子どもや教師はどう変わったか？

平成10年告示の中学校学習指導要領で和楽器が必修化され、全面実施の平成14年（2002年）から12年が経過しました。
今回の座談会では、小学校と中学校の先生方が、和楽器の指導に関する12年を振り返りつつ、今後の展望についても語り合います。
総括は尺八演奏家の藤原道山氏。
座談会から飛び出した先生方からの質問に、ズバリご回答くださいました。

参加者
木次久美先生（長野市立松代小学校）
鈴木竜也先生（東久留米市立第三小学校）
勝山幸子先生（港区立六本木中学校）
瀧　大輔先生（静岡市立清水興津中学校）

イラスト：ソリマチアキラ



●和楽器の導入と取り組みの現状

木次：松代小学校には５年前に赴任しました。それまでの授業でも箏で『さくら さくら』を弾いたり、太鼓を入れてお囃子をつくったりしていましたが、日本の伝統音楽のよさを伝えるものではありませんでした。しかし松代小学校は、真田家に伝わる八橋流箏曲を箏クラブの子どもたちが教わっていましたし、松代独自の雅楽もあり、童謡の作曲家である草川 信や海沼 實のふるさとでもあるなど、日本の伝統音楽を身近に感じられる地域でした。私はたまたま全日本音楽教育研究会全国大会で雅楽を題材にした授業をしたことから、松代雅楽のグループに入り、そこで笙を演奏するようになって初めて、日本の伝統音楽のよさはここかな、と分かるようになりました。例えば、ひとつの音を大切にすることなど、日本の伝統音楽独特のものを子どもたちに伝えたいと思って授業をしています。
鈴木：前任校で和楽器を扱うようにと言われて始めました。都の研究会では邦楽教育研究会に参加し、いろいろ勉強させていただきました。そして「小学生が篠笛を吹けるのだろうか？」と思いつつ篠笛を始めました。５年生で導入したところ、思いの外子どもたちのとっつきがよく、私より上手に吹ける子どももいました。学校が変わると環境も変わり、予算の問題もあるため、現在は前任校と同じように活動できていないのが現状です。
瀧：10数年前、赴任していた中学校にボランティアで来てくださった方とTTで授業をしたことがきっかけです。それまでは和楽器を体験したことがなく、教科書に載っていてもなかなか指導には踏み込めない部分があり、導入当初はすごくためらいがありました。和楽器というとどこか敷居が高く、子どもに教える自信がなかったのです。ボランティアの方に、調弦の方法から作法まで教えていただきながら勉強することで、和楽器を身近に感じるようになりました。私はフルートを吹くので、いっしょに『春の海』を演奏する機会があり、そのときに「箏っていいな」と日本の音の心地よさを味わったことから、『六段』を弾けるようになりたいと思い夏休みに習いに行きました。そこで和楽器のよさやおもしろさが分かってきたと思います。それ以来、数校に赴任しましたが、箏や篠笛、和太鼓を自分なりに学び、子どもたちと楽しみながら授業に取り組んでいます。
勝山：私自身が中学生のときにお箏クラブに所属していたことから、箏ならなんとか指導できるのではと思ったのがきっかけです。単に箏を弾くだけではなく、日本の音楽のよさを感じ取らせたいと思いながら、和楽器としては箏と和太鼓を授業に取り入れています。１年生は器楽の学習として『さくら さくら』を箏で弾けるようにします。２年生は箏を用いて創作の学習を行います。自分のイメージした桜を「さくら」の七七八を使っていろいろな奏法を組み合わせてつくり、図形楽譜に書き、演奏します。３年生は和太鼓。奏法を学んだ後に創作を行います。学習指導要領の創作の指導事項イの構成を学習します。鑑賞と組み合わせることもあります。

○かつやま・さちこ
港区立六本木中学校

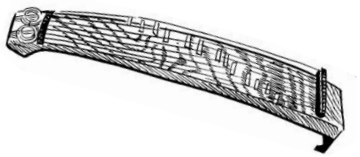
瀧：１年生では日本の民謡について映像を使いながら紹介しています。２年生では箏を用いて『さくら さくら』を練習します。箏の数が少ないときには、３人グループで、メロディーを弾く人、合いの手を弾く人、伴奏を弾く人に分かれ、箏を囲むようにして演奏します。あまり時間をかけられないので、１ヶ月ぐらいで行います。３年生では少し発展させて、古典芸能の歌舞伎、長唄などを中心に鑑賞をします。そうした実践を通して、音の幅が広がるというか…音を大事に弾くようになりました。雑音のような音、響きのある音など、表現に幅が出てきました。

●「小中連携」という観点から感じること

瀧：静岡では地域で和太鼓や箏を体験している子どももいますが、実際に和楽器に触れたことがある子どもは少ないと思います。そのため学校にある和楽器を目にして実際に演奏すると、すごく喜びます。特に男子です。自分が音を出したとき、西洋音楽とは違う、その子にとっての「新しい響き」「心地よい響き」に魅力を感じるようです。合唱であまり積極的でなかった子どもが、和楽器だと一生懸命取り組むこともあります。

○たき・だいすけ
静岡市立清水興津中学校

勝山：港区は学校選択希望制なのでいろいろな小学校から生徒が集まってきます。ですから小学校で和楽器を学習した子でも、まったく経験していない子でも、中学校であらためてできることを指導しています。得意な子、楽しみにしている子が達成感をもてるように、かつ、初めての子でもできるように、指導内容を工夫します。１年生は箏の音色と間（ま）と奏法を学習します。小学校で学習してきた子は、弾き方や姿勢に気をつけるといい音が出るな、と気付いたり、初めて箏に触る子も技能的に簡単なのですぐに弾けるようになります。小学校で和楽器を体験した・しないという点では、実態はあまり変わらない気がします。
鈴木：私も状況は変わっていないと思います。むしろ和楽器導入時に比べて、今は妙に落ち着いてしまったようにも感じます。ある程度指導できるようになって冷めてしまった部分もあるかもしれません。中学校へどうつなげるかも難しいですよね。６年間和楽器はやらずに卒業させたという先生もいらっしゃいます。東久留米では音楽鑑賞教室としての連合行事はあっても、「行事」なのでふだんの授業は見えてきません。中学校からの要望では「これは取り扱わないで」と言われることもあります。
木次：ふだんお話しする中学校の先生は、小学校で和楽器を経験した子が一人でもいれば、グループ活動などの中心となり、さらに発展的なことができるようになるので、小学校で『さくら さくら』ぐらいは教えてもいいのでは、とおっしゃっていました。ただ「中学校でやることがなくなってしまう」と言われる先生もいると聞きます（笑）。本校では６年間で地域の音楽に少しでも触れてから卒業できるようにしています。３年生では童謡、４年生ではお囃子づくりで地域の民謡『大門踊（おおもんおどり）』などを扱い、５年生では箏の『さくら さくら』、６年生では雅楽と決めています。
瀧：特別な要望はありませんが、いろいろな体験を小学校のときからさせてほしい、音楽好きな子どもを中学校へ送ってほしいです。
勝山：小学校で日本の楽器に親しんで、「『さくら さくら』は弾けるよ！」という気持ちで中学校に来てくれると助かります。あとは和楽器に限りませんが音楽活動を通して「楽しい」体験や「うれしい」体験をたっぷりしてきてほしいと思います。そうすれば中学校では次のステップへと学習を発展させることができます。中学校は小学校のことを意外に知らないので、やはり小学校の先生とお話しすることは大事だなと思います。



●地域や学校を取り巻く環境の差が大きい

木次：松代には本当に伝統音楽がたくさんあります。その環境を生かし、地域の方とふれあい、楽器を少し触らせてもらって「おもしろいな！」と感じることも大切にしています。また、その地域に残っているものを素材にして指導していくことが重要だと思っているので、それを教育課程に位置付けるように整えています。例えば６年生では、総合的な学習の時間を使って、謡を入れて雅楽を発展させてきた松代雅楽の歴史などについて知ったり、松代雅楽の方と触れ合ったりする時間を設けながら音楽の学習を進めます。全日音研に合わせてそろえた吹きものと、もともとあった箏を楽箏のかわりにし、打ちものは小太鼓などで代用し、まねて演奏する学習をしました。日本の伝統音楽を扱った題材は、６時間以内で扱おうと考えています。楽器がない学校でもできることはあると思います。ただ、松代の場合、松代雅楽というグループの方たちを呼んで、実物の楽器に触ることができるのが大きな利点です。その音楽をこんなに愛している人がいるということを知り、生の演奏に触れられるのがとてもいいことだと思います。
勝山：和楽器の場合は特にCDや動画の限界を感じてしまいます。例えばCDやDVDでは、能の倍音をたくさん含んだ耳にビンビンとくる音は聞こえないし、声や楽器の音色のすごさというものが今ひとつ伝わりません。その点、アウトリーチで授業に来ていただくという方法はとてもよいと思います。生徒は生の演奏から多くのことを学び取ります。
鈴木：指導して気付いたのですが、木琴などを適当にたたいていた子が、お箏だとなぜかていねいに弾く。「ていねいに弾くものである」というイメージがあるのに加え、やはり音を知覚しているのではないでしょうか。そこを起点にすると授業もつくりやすくなるかなと感じています。和楽器指導のいちばんの難しさは「環境」だと思います。楽器があるのか、近くにアウトリーチで来ていただける団体があるのか。まったく手だてがない学校は厳しいですよね。「こんな手だてがあります」という話をしても、「それはその学校だからできるのよ」と言われてしまうこともあります。
木次：箏は本校にも３面しかないので、２人に１面欲しいときは、車で何度も往復して中学校から12面ほど借りていました。最近は隣の小学校にも３面あることが分かったので、それをお借りして全部で６面を使い、４人に１面で交替して使います。演奏だけでなく、音楽づくりへの発展も考えています。

●日本の音楽や和楽器に対する子どもの興味・関心は高い！

勝山：私が12年前と変わらないと思うのは、子どもたちの関心の高さです。こちらが思っている以上に、子どもたちは和楽器に興味を示すし、もっとやりたい！と言う点は変わりません。小学校で体験した子も、しなかった子も同じです。
瀧：生徒の興味・関心の高さについては私もまったく同じ意見ですね。
鈴木：私も子どもたちの和楽器への興味・関心は以前と変わらないと思います。
勝山：子どもは日本の音楽が好きなのに、こちらの都合で教えることができないのは、ほんとうに悲しいですよね。先生方は以前の「楽器もないのに指導するの？」というとまどいから「指導しなければ」という意識に変わってきていると思います。今は「じゃあどう指導を工夫すればもっとよい授業になるの？」という段階ではないでしょうか。

○きつぎ・くみ
長野市立松代小学校

木次：以前は、『越天楽』を聴かせても「中国っぽい」「不思議な感じ」などの反応しか示さなかったり、鍵盤ハーモニカでメロディーを吹かせてもつまらなそうだったりして、ここから一体なにが分

かるのだろう？と思っていました。でも、私自身が日本の伝統音楽のよさを分かっていなかったのだと思います。私自身が日本の伝統音楽を楽しむようになってきて、「ほら、こんないいところがあるよ」と子どもから引き出そうとすると、子どもも食いついてきます。教師が「日本の伝統音楽って楽しいな」と思った瞬間から、やっぱり変わってくるのではないでしょうか。自分が変わったからこそ、そう思います。
勝山：西洋音楽以外の音楽を聴かせるとき、教師は「生徒はこの音楽を聴いて何か変だと思うに違いない」というところから迫ろうとしがちです。でも、例えば『越天楽』にしても、世界の諸民族の音楽にしても、生徒は「へえ、こんな音楽もあるんだ～」とふつうに受け入れてしまうんですよ。そういう生徒の反応に、どう切り込んでいくのか、そこを今模索しています。

●子どもにとって日本、西洋の区別はない

瀧：和楽器の指導も大事にしたいのですが、１年生の器楽では、１ヶ月ぐらいリコーダーアンサンブルをします。３年生では１人１台のギターを扱います。授業数はコンパクトであっても、和楽器と西洋楽器の両方に触れさせたいと思います。
勝山：結局子どもは、「和楽器だから」ではなく、「楽器」そのものが好きなんですよね。演奏することに喜びを感じるのは人間がもつ欲求と関係しているからだと思います。私は、１・２年生ではアルトリコーダー、３年生ではギターも扱います。生徒はアルトリコーダーもギターも好きですし、それと同じ感覚で、箏にも三味線にも尺八にも興味を示すんです。教師があまり「日本音楽」「西洋音楽」と区別せずに扱ったほうがいいのではないかなと思います。
鈴木：本校の子どもたちも、和楽器とか西洋楽器とか区別せず、同じ楽器の中の一つとして和楽器をとらえていると思います。教師側が「今回は和楽器をやるぞ」と思っているから、子どもたちはそれを敏感に感じ取って構えてしまうのかもしれません。連合音楽会では、私は必ず日本の音楽を素材にした器楽合奏をするようにしています。今回『八木節』を扱ったとき「本当はこういう楽器で演奏するのだけれど、今回はこの楽器を使うよ」と言うと、子どもたちは単純に音やリズムを合わせるのではなく、どんなふうにすれば似た音になるんだろうと工夫します。ですから和楽器と西洋楽器に関係なく、音色の知覚が確実にあるのだと思います。

○すずき・たつや
東久留米市立第三小学校

木次：階名唱に抵抗のある子どもは、言葉で覚えられる唱歌（しょうが）や数字の楽譜に反応します。特に箏の場合は、自分で弾く弦が見えて弾いたとおりに音が出るので、こうすればこういう音が出るということが分かりやすいようです。鍵盤楽器やリコーダーが苦手だった子どもが、とてもがんばります。最初に雅楽を教えたときは、教科書にある五線譜を使いました。演奏できるようになった頃、松代雅楽の方に来ていただき、みんなで合奏してみたところ、すごくよくなりました。でも次にまた五線譜を見て演奏したところ、タテがそろってしまって、まったく違う音楽になってしまったのです。それからは五線ではなく、図形の楽譜を使うようにしています。すごく生き生きとした音になるんですよ！西洋の楽譜ではとらえられない部分を、波線などの図形で表すのは、小学生にとって楽しい活動のようです。

●こんな子どもに育ってほしい！

瀧：私のポリシーでもありますが、子どもたちを音楽好きにさせたいです。合唱好きだよ、和楽器好きだよという子になってくれたらいいですね。さらに言うと、表現活動を通して自分の考えや思いを伝えられる、表現力豊かな人間に育ってほしいと思います。

木次：和楽器を演奏したり和楽器をまねて鍵盤ハーモニカを吹いたりすることで、タンギングをしないことや、音が揺れていることなどの日本の伝統音楽独特のものに気付く子に育てたいと思います。実際、雅楽の勉強後には、今まで全然発言しなかった子が「雅楽のときはこういう音だったから」と日本の伝統音楽をとっかかりに発言したり、他の国の音楽の鑑賞でも音をよく聴いたりしています。私自身、日本の音楽を楽しいなと思うようになってから、さまざまなジャンルの音楽がもっとおもしろくなりました。自分の国のものに誇りをもつことで、他のものを受け入れられると同時に、別の視点が育ちます。そういう子どもを育てたいです。
鈴木：ジャンルにとらわれない音楽好きな子どもを育てたいです。その中でも「和楽器が好き」「日本の音楽が好き」と言う子が１人でも多くなるようにしたい。児童に「音楽の何が好きか」と訊くと、和楽器を挙げる子はあまりいません。ですからまだすべきことがあるんだと思っています。最終的に外国の方に「日本の音楽にはこんないいところがあるんですよ」と伝えられるような子に育てるため、小学校段階でできることを指導していきたいと思います。
勝山：和楽器を通して、日本の音楽のよさや特徴を学びますよね。その背景にある音楽と人との関わり、そういう文化や歴史も含めて興味をもって学んでほしいです。そして世界のさまざまな音楽のよさをも理解できる人に育っていってほしいと思います。これって異文化理解や人間理解へとつながるのではないでしょうか。音楽科だからこそできることだと思います。

藤原道山さんの総括へ ⇨

子どもの「できる喜び」の発見を！

藤原道山（尺八演奏家）

●ふじわら・どうざん
10才より尺八を始め、人間国宝・故山本邦山に師事。
東京芸術大学大学院音楽研究科修了。2001年ＣＤデビュー。以来、これまでに10周年記念ベストアルバム「天-ten-」、ウィーンにてレコーディングを行ったシュトイデ弦楽四重奏団との共演アルバム「FESTA」他計13枚を発表。その他、自身の活動と並行して、映画・ＣＭ音楽への参加や、「ろくでなし啄木」（三谷幸喜作・演出）、「スーパー歌舞伎Ⅱ」（四代目市川猿之助）などの音楽も手がける。現在、東京芸術大学音楽学部邦楽科尺八専攻講師として後進の指導も積極的に行っている。NHK「にほんごであそぼ」にレギュラー出演中。

［オフィシャルホームページ］http://www.dozan.jp

今回の座談会に参加された先生方が、和楽器に対して真摯に取り組んでくださっていることを感じました。邦楽のことを強く意識されているのだなあと、うれしく思っています。

邦楽の演奏家として、12年前の和楽器導入は非常に画期的なことであり、たいへんうれしかったことを覚えています。やっと形になった…文科省が動いてくれた…と。しかしながら現場の先生にとっては、今まで経験したことのない専門外のことを教えなくてはならないわけですからね。「私たちは全然知らない」「ただでさえ少ない時間の中で、何でこんなことをしなければいけないんだ」「子どもには難しいのではないか？」というような否定的な意見を耳にすることもありました。でも僕としては、どんな形にせよ「きっかけになってほしい」と思いましたし、12年を経た今、先生の意識が変わってきたことがいちばん大きな変化だと思います。結局、子どもは先生によって変わります。和楽器導入当初から変わらないのは、座談会であったように子どもたちの和楽器への関心の高さです。彼らにとって日本の音楽は、基本的には初めての体験ですから、目を輝かせてくれます。

最近僕は「先生、和楽器はできなくてもいいんですよ」と言っています。ご自分でしっかり習いに行っている先生は別として、多くの先生は和楽器を自分の専攻していた楽器ほど弾けませんよね。でもそれは生徒と同じ立場ということです。もし生徒たちのほうができたら「あなたたちのほうができたね」って。生徒は喜びますよ。そこからできる喜びを発見でき、一生懸命になってくれるのではないかと思います。

〈先生方からの質問に回答します〉

木次久美先生

Q. 道山さんは日本の音楽のどこによさを感じていますか？

A. 一言でいうのは難しいですが、まずは「音色」でしょうか。僕は音楽とは言葉だと思っているので、楽器を弾いていても「歌」だと思っています。音色自体に語りかけるようなところがありますし、そこで感情を表現します。西洋音楽の曲を日本の楽器で演奏すると、どことなくクドくなってしまうのは、音色で語ってしまっているうえに、さらに旋律や和声が語るからなのです。

Q. 子どもたちには古典の曲と現代の曲の両方を聴かせるべきでしょうか？

A. 先生が好きな曲であればどちらでもよいと思います。義務的に「聴かせなければならない」ではなく、先生が「この曲のこういうところが好きなんだよね！」と語ることのできるものを聴かせてください。

Q. 日本の楽器は自然と調和しているように感じます。それについてどう思われますか？

A. 日本の音楽は自然や季節、風景、人情などを意識しながらつくられてきたものですから、そのとおりだと思います。移ろいが自然で、急に変化することなく、徐々に徐々に変わっていくという感じ。…最近は季節もずいぶん急に変わりますが（笑）。古典の曲は素材の味わいを大切にしてきた和食のようですので、現代では物足りなく感じられる人もいるかもしれません。でもだんだんとそのよさに気がつくと思います。

鈴木竜也先生

Q. アウトリーチに来ていただくときは、どんな準備をすればよいのでしょうか？

A. できる範囲のことをしていただければよいです。全部先回りしなくても、そこで出会って驚いてほしい、感じてほしいということもあるので、あえて準備しなくてもいいと思いますし、反対に、事前に知っていたりその楽器を演奏したことがある場合は「あの人すごい！あんなふうに手が動くんだ！」と、奏者のすごさが分かることもありますよね。先生の判断でよいのではないでしょうか。

勝山幸子先生

Q. 子どもに分かりやすく伝えられる日本音楽の特長を、分野ごとに教えてください。

A. 大きく特長というと、まず日本語を使っているということだと思います。日本語の発音に加え、音楽も日本の風土から生まれた言葉のようなものです。ですから音色などもそれに準じています。具体的な分野を挙げると、①長唄：劇場音楽です。歌舞伎など演劇要素のあるものの伴奏音楽なので、今で言うオペラやミュージカルの伴奏です。②お箏：ある意味ピアノです。いろいろなシーンで使われ、伴奏的な要素もある。長唄でもたまにお箏を入れる曲がありますし、もともと雅楽から始まった、日本の芸能の原点にあるような楽器です。③三味線：ギターやヴァイオリンです。当時の流行歌を歌っていた楽器。それが劇場に入ったり、流し…新内流しであったり、お座敷の音楽になったりしました。こうして西洋音楽の楽器に例えなければいけないというのが、非常に悲しいところではありますが！

瀧 大輔先生

Q. 演奏家のお立場から、日本音楽を学校で教えるときに大切にしてほしいことは何ですか？

A. なかなか難しいと思いますが…やはり生のいい音を聴いてもらいたいということでしょうか。そして聴くときは先生自身がいいと思ったものを聴かせてほしい。誰かの受け売りや、書いてある借り物の言葉ではなく、先生がどう思うかを伝えてあげてください。分からないことがあれば「先生も実はよく分からない。だから今度、先生も質問してみるよ」と生徒と同じ立場で言う。そうすると生徒も質問しやすくなると思います。大人も知らないことがあるんだ、自分たちもがんばってみようかなと思うはずです。

＊＊＊

2015年に道山さんはデビュー15周年を迎えました。
サントリーホールでのコンサートを含め、いろいろな企画が予定されています。

★ 藤原道山 15th Aniversary コンサート
2015年８月24日（月）サントリーホール（東京）
http://www.dozan.jp/

Information

2015年に予定されている主な研究大会やイベントをご紹介します。

研究大会

10月 October

●16日(金)

新潟県　上越文化会館、
上越市立大町小学校、上越市立国府小学校、
上越市立南川小学校、上越教育大学附属小学校、
上越市立城西中学校、上越市立三和中学校

第57回　関東音楽教育研究会　新潟大会

大会主題　「味わおう音楽を　伝え合おう思いを」
～音楽のよさを感じ取り
音楽表現を高め合う学習を目指して～

問い合わせ先　上越市立下黒川小学校　校長　高倉芳行
〒949-3233　新潟県上越市柿崎区柳ケ崎707
TEL 025-536-2467 / FAX 025-536-6506

●29日(木)・30日(金)

静岡県　静岡市民文化会館、常葉学園中・高等学校、
静岡市清水文化会館マリナート

**平成27年度　全日本音楽教育研究会全国大会
静岡大会(総合大会)
第14回　東海北陸音楽教育研究大会　静岡大会
平成27年度　静岡県教育研究会音楽教育研究部大会**

大会主題　「ひろがれ音楽　つながる心」

問い合わせ先　大会実行委員長
静岡市立長田南小学校　校長　長野恭江
TEL 054-259-6133 / FAX 054-257-8763
http://music.shizuoka.ednet.jp

11月 November

●6日(金)

北海道　まなみーる岩見沢市民会館・文化センター、
北海道岩見沢緑陵高等学校

第57回　北海道音楽教育研究大会　空知岩見沢大会

大会主題　「わかる楽しさ　できるよろこび　わかちあう感動
～思いを響かせあう音楽の学びをめざして～」

問い合わせ先　大会運営委員会
空知支部事務局長　菅原理恵
岩見沢市立栗沢中学校内
TEL 0126-45-2784 / FAX 0126-45-3784

●6日(金)

青森県　リンクステーションホール青森、青森市立泉川小学校

**第63回　東北音楽教育研究大会　青森大会
第38回　青森県音楽教育研究大会　青森大会**

大会主題　「感じよう！ 伝えよう！ 分かち合おう！
音楽の喜び」

問い合わせ先　大会事務局
青森市立沖館中学校　教頭　会津完治
〒038-0002　青森県青森市沖館5-19-1
TEL 017-781-0855

●20日(金)

広島県　上野学園ホール(広島県立文化芸術ホール・
旧広島郵便貯金ホール)、
広島市立中筋幼稚園、広島市立大芝小学校、
広島市立中筋小学校、広島市安佐南区民文化センター、
広島県立安古市高等学校

第46回　中国・四国音楽教育研究大会　広島大会

大会主題　「深める楽しさ　つながる喜び」

問い合わせ先　大会事務局
広島市立中筋小学校　教頭　岩本ゆか
〒731-0122　広島県広島市安佐南区中筋2-15-5
TEL 082-879-1350 / FAX 082-870-6360

●26日(木)・27日(金)

宮崎県　宮崎市立赤江小学校、宮崎市立宮崎西小学校、
宮崎大学教育文化学部附属小・中学校、
宮崎県立宮崎西高等学校、
宮崎県立みやざき中央支援学校、
メディキット県民文化センター

**第56回　九州音楽教育研究大会　宮崎大会
第40回　宮崎県音楽教育研究大会　宮崎地区大会**

大会主題　「音・人　広がる音楽の力
～広げよう　深めよう　そしてつながろう～」

問い合わせ先　宮崎市立広瀬中学校　楠田一枝
〒880-0211　宮崎県宮崎市佐土原町下田島20305番地12
TEL 0985-73-1818 / FAX 0985-73-1971
http://www.mcnet.ed.jp/shochuonken/index.html

●27日(金)

京都府　京都コンサートホール　他

第57回　近畿音楽教育研究大会　京都大会

大会主題　「京(みやこ)の響き　つながるハーモニー」

問い合わせ先　第57回近畿音楽教育研究大会京都大会事務局
京都市立明徳小学校　西川聖子
〒606-0021　京都府京都市左京区岩倉忠在地町221
TEL 075-701-0111 / FAX 075-701-0112

— 新作合唱曲による公開講座 —

Spring Seminar 2015

今年度もコンクール自由曲向けの新曲発表会「Spring Seminar 2015」が開催されます。
同声・女声・混声の各２曲を合唱団、司会者、作曲家と学びます。
セミナー終了後、「小学校の部」「中学校の部」「高等学校の部」に分かれて、Nコン課題曲のワンポイントレクチャーも行います。

● 日　時：2015年3月30日(月)
12:45～17:30
会　場：津田ホール(渋谷区)
参加費：4,000円(高校生以下2,000円)
テキスト代含む

● 出演者

同声合唱	加藤昌則	小田原少年少女合唱隊(指揮：桑原妙子)
	春畑セロリ	
女声合唱	佐井孝彰	合唱団るふらん(指揮：栗山文昭)
	横山潤子	
混声合唱	三宅悠太	harmonia ensemble(指揮：福永一博)
	森山至貴	
司会	藤原規生	

● Nコン課題曲ワンポイントレクチャー講師
(小)加藤昌則
(中)三宅悠太
(高)桑原妙子
※ご参加の方はNコン課題曲の楽譜をお持ちください。

● お問い合わせ：
教育芸術社　スプリングセミナー実行委員会
TEL 03-3957-1168 / FAX 03-3957-1740
http://www.kyogei.co.jp/